

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護学生のフレイルに関する理解を 明らかにするための調査研究

三井沙耶 美馬明日香 若松友紀
(指導: 平義樹)

緒言

フレイルとは、高齢期に生理的予備能が低下することでストレスに対する脆弱性が亢進し、生活機能障害、要介護状態、死亡などの転帰に陥りやすい状態をいう。さらには身体的問題のみならず、精神・心理的問題、社会的問題を含む概念であり、2014年に日本老年医学会が定めている。日本で高齢者は年々増加しており、2018年の高齢化率は27.7%で、2025年には後期高齢者が2000万人を超えるといわれている¹⁾。これに伴いフレイルに陥る高齢者も増加することが予測される。フレイルに陥った高齢者を早期に発見し、適切な介入をすることにより、生活機能の維持・向上を図ることが期待されるため、フレイルの意義を社会に周知することが必要である。現在、フレイルは社会的ニーズの高まりにより、主に新聞といったメディアに掲載される機会が増えているが、フレイルの認知度は低く、全国の15~79歳男女66013人への調査では、フレイルの言葉を認知している人は全体の1.1%に過ぎない²⁾。また、新聞は、30代以上では毎日のように利用する人が2割以上いるが、20代以下では1割未満³⁾の利用に留まっている。さらには大学の講義でもフレイルについて取り扱われることは多くなく、将来高齢者医療を担う看護学生にフレイルの概念が十分に周知されていない可能性が高い。しかしながら看護学生のフレイルに対する認知度についての研究はこれまで行われていない。そこで本研究では、看護学生のフレイルという言葉や概念、予防法について認知の程度を明らかにすることを目的とする。これらを明らかにすることにより、学生に対する啓発活動の必要性について考える手がかりを得たい。

方法

研究対象: A医科大学の医学部看護学科に所属する学生240名(60×4学年)を対象とした。

データ収集方法: 調査は、調査期間内(2020年8月10日から2020年9月7日)においてGoogleフォームを用いて、オンラインでアンケートの配信と回答を行った。

調査内容: 学年、性別の他、フレイルに関する24の質問項目を調査した。各質問項目については表1内にその概略を記載した。質問はフレイルについての概念、身体的、心理的、社会的フレイルおよびフレイルの予防について問う内容とし、フレイルについて総合的な理解度を測るものとした。

データ分析方法: 得られたアンケート結果のうちフレイルの認知度に関わる問2、問7~24については、とてもそう思うを4点、そう思うを3点、あまり思わないを

2点、全くそう思わないを1点(質問によっては、全くそう思わないを4点、あまり思わないを3点、そう思うを2点、とてもそう思うを1点)として、また、合っているもの(該当するもの)を選択する形式である問1、問4~6は、正解(該当する)を2点、不正解(該当しない)を1点として数値化し、認知度の高さの指標とした。問3は問いの性質上、数値化していない。

データは単純集計後、各問と全体の得点率を算出した。次いで設問間の得点率の差と、全体及び各設問における学年間の差を検定した。検定には多群間の差にはKruskal-Wallis検定、2群間の差にMann-Whitney U検定を用いた。統計解析にはR ver.3.4.2を用いた。

倫理的配慮: 対象者には、研究目的と方法、匿名性の保持、調査への協力は自由意志であり拒否できること、協力の有無によって不利益を被ることの無いこと、得られた結果は研究者の責任の下で管理することなどについて文書で説明した。調査協力への同意が得られた場合のみオンラインのアンケートに回答してもらった。オンラインのアンケートはすべて無記名とし、個人が特定できないように配慮した。

結果

アンケートは学内メールでA医科大学医学部看護学科の1~4年生240名に送信し、70名(回収率29.2%)から回答が得られ、有効率100%であった。

1.全体及び学年間のフレイルについての認知

アンケートより得られた全体および各問の得点率と、学年間の差の検定結果(p値)を表1と図1に示す。フレイルの認知度に関わる問2、問7~24の全体の得点率は75%を超えた。設問間の得点率の差を検定した結果 $p < 0.01$ となり有意差を示した。またフレイルを認知する機会が高い(問1、問2、問4の得点率が高い)ほど全体の得点率が高い傾向が見られた。

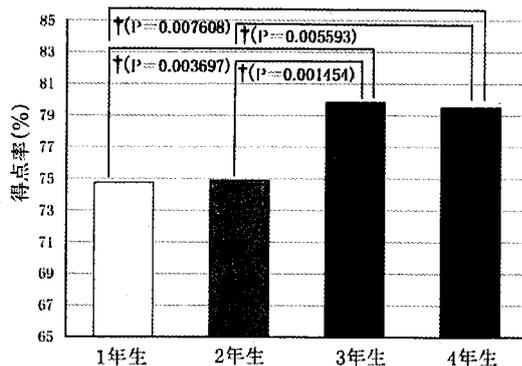
2.質問ごとの傾向

問5~24までのフレイルに関する問では、質問ごとに得点率は異なり、70~80%の得点率の間が多かった。得点率が高かったのは問5、問6、問19で、得点率が低かったのは問7、問10、問21であった。全体(問2、問7~24)では有意差($p = 0.0007616$)があり、図1に示す様に、学年間は1-3学年間、1-4学年間、2-3学年間、2-4学年間で差が見られた。1-2学年間、3-4学年間で差は見られなかった。他に有意差があったのは、問2、問14、問24である。これらの学年間における得点率の差は問2(1-3学年間、1-4学年間、2-3学年間、2-4学年間)、問14(1-3学年間、1-4学年間)、問24(2-3学年間、2-4学年間)で、いずれもp値は0.05以下であった。

質問項目	得点率	学年間の差 (p 値)
全体(問2、問 7~24)	76.1	
全体(問 5~24)	77.5	—
1 学年	74.7	—
2 学年	74.9	—
3 学年	79.8	—
4 学年	79.5	—
問 1 フレイルという言葉の認知	90.0	—
問 2 フレイルの認知	71.1	
問 3 認知した方法	—	—
問 4 授業の有無	77.9	—
問 5 どのようなものか	*95	—
問 6 予防はどれに当てはまるか	*98.6	—
問 7 フレイルからの回復は困難か	‡62.5	0.3491
問 8 要介護の要因の半分か	71.8	0.1079
問 9 歩行能力減少は危険因子か	78.2	0.4046
問 10 健康認識とフレイルは一致するか	‡65.4	0.3649
問 11 75 歳以上はフレイルか	78.2	0.04585
問 12 改善には早期認識が重要か	87.1	0.2187
問 13 メタボはフレイルか	69.3	0.5345
問 14 体重過減少はフレイルか	76.1	
問 15 ロコモはフレイルか	72.2	0.05797
問 16 痛風はフレイルか	68.2	0.2028
問 17 友人との買い物はフレイル予防か	87.9	0.1116
問 18 よく噛んで食べる事は予防か	91.4	0.2855
問 19 人との食事はフレイル予防か	*92.1	0.1947
問 20 趣味活動の低下は危険因子か	88.6	0.1213
問 21 地域活動不参加はフレイルか	‡65.7	0.2317
問 22 物忘れ多発はフレイルか	79.9	0.1468
問 23 うつ病はフレイルか	73.6	0.2752
問 24 外出の減少はフレイルか	83.6	

《表 1. 問題ごとの得点率と有意差》 (n=70)(有意水準p<0.05)

注:†は有意差のあるもの、*は上位3つ、‡は下位3つ
認知度に関わる質問(Q5~24)の得点率



《図 1. 学年ごとの得点率と学年間の有意差》

考察

フレイルの認知度は全国の 15~79 歳男女 66013 人への調査によると 1.1%に過ぎない²⁾。大学の講義でもフレイルについて取り扱われることは多くないため、看護学生にもフレイルの概念が十分に周知されていないのではないかと推測し、本研究を実施した。今回の研究方法では問題全体の得点率は約 75%に達した。問1でフレイルという言葉を知った事のある学生は 90%に達したが、フレイルの認知度に関わる問 5~24 の全学年の得点率は 77.5%に留まり、フレイルというワードは知っているものの、理解度は低いと

考えられた。

また問題間で得点率は異なり、得点率の高い問 5、問 6、問 19 はフレイルの概念についての問と、食事についての問であり、得点率が低い問 7、問 10、問 21 はフレイルの特徴である可逆性についての問と、心理・社会的フレイルについての問であった。このことよりおおまかなフレイルの概念については認知があるものの、身体・心理・社会的な面があるという特徴や予防方法についての理解度は低いと考えられた。

認知度に関わる問 5~24 の得点率で、1-3 学年間、1-4 学年間、2-3 学年間、2-4 学年間で有意に差があったことより、1、2 学年より 3、4 学年の方がフレイルに関する認知度、理解度は高いといえる。また、問 3 のフレイルを認知した方法についての問で“授業”と答えた者は 1、2 学年では 9.7%であったのに対し、3、4 学年では 92.3%であった。このことから、第 3 学年で高齢者看護学の授業が始まり、学習機会が設けられたことで認知度、理解度が向上したと考えられる。しかし全 24 問のうち有意差のあるものは問 2、問 14、問 24 の 3 つにすぎず、全体の得点率に有意差はあるもののそこまで学年間の差はない可能性が考えられる。

以上の結果から、フレイルの概念について看護学生は一般よりは認知度は高く、ある一定の水準はあるものの未だ十分に周知されていないと考えられる。フレイルという概念は平成 26 年の 5 月にプレスリリースされた用語であること¹⁾、フレイルを含めて高齢者の特性を踏まえた保健事業の考え方や、具体的な内容をガイドラインとして取りまとめたのは平成 30 年とごく最近である⁴⁾ことが周知不足の主要因であると考えられる。本研究では看護学生のフレイルという言葉や概念、予防法について認知の程度が明らかになり、学生に対する啓発活動の必要性が明らかになった。看護学生に対し、今後フレイルに関する学習機会を増やしていく必要があると考える。

研究の限界

今回の研究での回収率が低かったが、これは新型コロナウイルスの影響で調査方法をオンラインでアンケートとしたためと考えられる。また対象が 1 大学と少ないことから、一般化するには限界がある。今後対象者の拡大を行い、調査する必要がある。

謝辞

本研究の調査にご理解・ご協力いただきました看護学科 1~4 年生の皆様へ深く感謝申し上げます。

参考/引用文献

- 1) 荒井秀典(2014):フレイルに関する日本老年医学会からのステートメント,一般社団法人日本老年医学会 一般社団法人日本老年医学会.
- 2) インテージ健康食品・サプリメント+ヘルスケアフーズ市場実態把握レポート(2020-5-29):<https://www.intage-healthcare.co.jp/news/release/d20190726/>
- 3) 渡辺洋子(2019):SNSを情報ツールとして使う若者たち「情報とメディア利用」世論調査の結果から、放送研究と調査、38-56.
- 4) 厚生労働省(2019-4):<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12401000-Hokenkyoku-Soumuka/0000205007.pdf>